

NPO 森を再生する会会報 第10号

<http://www.katch.ne.jp/%7Ekamiyaf18/> 平成 17 年 4 月 16 日

2005 年 春の植樹祭ご案内

とき：平成 17 年 5 月 1 日（日）10：00 - 15：00

ところ：愛知県北設楽郡設楽町大字田峯字西川 16 番地

NPO 森を再生する会「水源の森」

参加費：無料

バス代：1,000 円（バスを利用する方のみ）

安城学園高校前 8：00 出発

バス利用者は、事前に事務局へ申し込みください。

弁当は各自持参してください。

流域住民で力をあわせ、ブナ、ハウノキ、ミズナラ、トチノキなど土地本来の木を植え、生態系豊かな「緑のダム」・「水源の森」をつくり、子どもたちに命の遺産を残しましょう！

ドングリの実里帰り

江坂慎也

今から 2 年前、段戸山のブナの原生林に入って、ブナやミズナラのどんぐりを拾いに行った。安城西中学校の「ドングリーズ」の生徒も一緒であった。「ドングリーズ」は、どんぐりを拾って学校で育て、それが成長したら植樹しようという活動をしている。

そのときの案内を「三河炭焼き塾」の斉藤和彦さんをお願いしたところ快く引き受けてくれた。そして、どんぐりを拾っているとき、斉藤さんが生徒に、「今年は、ものすごいどんぐりの実が落ちている。年々多くなっています。これはねえ、どんぐりが種を残そうといっしょうけんめいになって実を落としているんだよ。」と言われた。「なぜ、そんなにどんぐりが実を落とさなくてはいけないんですか。」と生徒が尋ねたところ、斉藤さんは「どうも温暖化の影響でブナの原生林が生育しにくくなっているからだと思うんだよ。」と言われた。この段戸の森まで温暖化の影響がでているのかと考えさせられた。また、山の自然の中にはいることによって、様々なことを学ぶことができるものだと思ふたため実感したものである。

さて、どんぐりの実は順調に生長しており、段戸の森に、時期が来たら早く里帰りしたいと待ち望んでいる。5 月か 10 月の NPO 法人「森を再生する会」主催の植樹祭には、あの 2 年前のどんぐりの里帰りを果たしてやりたいと思うこのごろである。

幼苗植栽手法による郷土の森づくり

以前まで幼苗(苗木)を用いた植栽は林業によるスギ・ヒノキ林のような人工林において行われていた方法でした。「幼苗植栽手法による郷土の森づくり」技術は**本来の自然の姿**を指向し、苗木を育てながら森づくりを行う方法です。「幼苗植栽手法による郷土の森づくり」は自然復元を目的として、**潜在自然植生**のデータを基に樹種を選定し、**自然植生を目指した森**を造ることを基本としています。この**植生学的知見による森づくり**は、生態学者の宮脇昭氏(横浜国立大学・名誉教授)が提唱した生態学的手法で、計画する土地に対して持続し安定した「地域の自然の森」「極相林」「潜在自然植生」を考慮した緑化計画です。その土地固有の森づくりを樹木の幼苗による植栽手法で、特に海岸埋め立て地や造成地のような環境条件の厳しい地域や大規模面積の緑化、斜面の樹林化において有効な手法です。

植栽する際のポイント

- ・土地本来の樹種を選定する。(潜在自然植生)
- ・混植・密植栽培する。
- ・土壌表面を覆う。(マルチング)

樹種を選定

- ・潜在植生を決定した後高木樹種を選定する。
- ・自然植生における高木、亜高木、低木の配列に従って樹種を選定し、かつ市場調達可能な調査を行う。
- ・計画地の植生の主木となる樹種を中心に多種類のを配植する。

密植の効果

- ・密植により樹木相互の競争の働きが作用し、より早く葉が茂る。
- ・密植による早期のうっ閉は強風や潮風などを総合的に緩和する。
- ・うっ閉化により枝葉がフィルターとなり、地表の乾燥、雑草の繁茂を抑制する。
- ・降雨が直接地表へたたくつけられることを和らげ、表層土の流亡を防ぐ。

安定期の管理 ~メンテナンスフリー~

苗木の初期の段階から枝葉が重なり合ううっ閉状態まで生育した後は、ほとんど管理が必要のない時期に到達します。自然淘汰による自然のバランスに任せます。

‘05.5.1春の植樹祭の樹種
ブナ40本、コハウチワカエデ40本
ミズメ40本、ホオノキ30本
ミズナラ40本、トチノキ30本
クリ40本、キハダ20本
アカシデ40本、ウワズミザクラ30本
ミズキ30本

青森県山内丸山遺跡から

自然から学ぶ**燻煙乾燥木材**の思想

青森県山内丸山。この丘に立つと、イマの私たちの在り方が5千年後の人々にどう評価されるのだろうか.....ふとそんな思いが横切ります。ただ人間のためだけの利便性の追求、異常ともいえる資源の浪費が、かけがえのない地球、そして私たちの生命をも危うくしている.....自然と共存する縄文の暮らしに学ぶべきものがあるのではないか。

化学物質による室内汚染

シックハウスといわれる原因のほとんどが化学物質です。現代の住宅は化学物質のかたまりのようなものです。シロアリ駆除用の殺虫剤、フローリングからの防虫剤・防腐剤、壁紙からの可塑剤・防カビ材、衣類からの防虫剤、カーテンからの防水剤・防炎剤。この複合汚染が知らず知らずのうちに健康を蝕んでくるのです。多く使われている輸入木材は臭化メチルなどの薬品処理してあり、その木材を水槽に入れてやるとメダカが死ぬという実験があります。(青森県山内丸山遺跡：シンボルの掘っ建て柱は古代方式の燻煙乾燥処理が施してある。)

化学薬品を否定する燻煙乾燥木材

木の優しきをもっと活かそう 燻煙乾燥木材は化学物質に一切たよらないクリーンな素材。その腐りにくい、虫の蝕害の少ない、つまり長期使用に耐えうる効果は、視野を広げれば、貴重な森林資源の浪費を防ぎ、21世紀へ向けての無公害エコロジーな木材です。

その原点

飛騨高山の合掌造り。貴重な文化財として世界的に保護されていますが、本来は民家。日々の暮らしがここにあったものです。親子代々にわたっての住居。この家の長寿と堅牢さ。燻煙乾燥木材はそこからヒントを得ています。囲炉裏。そこから立ちのぼる絶えることのない煙が柱を、梁を、屋根裏の茅を燻しあげます。永い年月にわたってできあがったあの大黒柱、これが強く、腐りにくく、さらには虫食いなどを防ぐ木材に仕上がっていくのです。木を煙によって乾燥させる。.....化学薬品のまったくなかつた昔の人の知恵。これが燻煙乾燥木材の原点。

その科学

煙には殺菌作用、防腐作用、防虫作用などがあり、燻製食品など保存食にも利用されてきました。つまり人体に害のないもの。燻煙乾燥木材の原理はこれと同じ。木の細胞リグニンと煙の成分カルボニル化合物などを結合させて、さきの防腐効果の高い材質に仕上げるのです。また、木の細胞のひとつひとつには樹液を流動させる際に水分を調節するバルブ（ピット）があります。このピットは樹木の生命維持には重要な仕組み。木の伐採とほぼ同時に水の表面張力によってこのピットが閉じられ、水分の蒸発を防ぎ枯れ死を防いでい

るのです。生命維持の自然の不思議。木の乾燥とは、この弁をとりのぞき細胞中の水分を蒸発させること。ところが木の繊維は急速に高温で乾燥させると、その繊維が破碎され、強度を弱め、さらには木本来の持つ吸湿性＝乾燥の調整機能をも失ってしまうのです。燻煙乾燥木材は低温乾燥、しかもその燃料に産業廃棄物など有害物質を使用しませんからダイオキシンなどの心配はまったくありません。たとえば、カツオブシ。カチカチとした硬度、強度とともに腐敗菌をよせつけない保存性、食品としての昔からの安全性。燻煙乾燥木材は木の文化、日本人の知恵といえるのです。

その現代性

木はこれまでそのほとんどが生材で使われてきました。そのため建築後に割れ、縮み、歪み、さらには腐食菌の発生からの腐れなどが避けられないデメリットになっていたのです。木を乾燥させて使うこと、つまりこのデメリットを解消し耐久性、強度を高めて使うことは、いまや生産者の常識となりつつあります。燻煙乾燥プラントは低コスト乾燥、しかも大容量のプラントです。ちなみにこのプラントは煙の排出がありません。さらに、製材時に出るオガ屑、端材などクリーンな燃料を使用しますから、全くの無公害型設備です。生産された木材がまた化学薬品の塗布などを必要としません。したがってこれも無公害。燃焼中に抽出される木酢液、燃焼後の灰とともに肥料、土壌改良剤に……。地域の間伐材の有効利用、森林の計画伐採、植林などリサイクルシステムとして視野を広げるとまさにエコロジー。

もっと木を活かそう

青森県の特産にヒバという木がありますが、この木は腐りにくく、虫がつかず...といった特性で知られ、昔から大切に保護され、神社仏閣、豪農の家などに使われた高価な木。その特性はヒノキチオールというこの木の持つ成分によるもの。ヒノキチオールは戦前までは、医薬品として結核の治療薬、食品の保存剤、防カビ剤、防虫剤など幅広く研究されてきました。それが戦後、抗生物質、化学物質の登場により見捨てられてしまったのです。ところがその化学物質に様々な害が生じてきた今、再び注目を浴びてきたのです。森林浴で知られるフィトンチッドはこのヒノキチオールの一種。精神安定剤の効果。樹木にはこれに限らず、その木その木によって効果を発揮する成分を持っています。その解明はまだ充分とはいえませんが、現代でのストレスの解消から化学物質によって引き起こされる現代病への対症まで多方面からの研究が進んでいるのです。唯単に木の優しさを感じ、情緒的に捉えるだけでなく、その優しさを科学的に捉えようとする時代。三内丸山遺跡から想像する豊かな暮らし、優しい自然を見直そう、そして学んでいこうという提案です。

(古代人菅岡氏より資料提供)

額田町から

額田町で林業に携わり、現在炭焼きを仲間で行っておられる高木田 洋さんの炭焼き工房を訪ねました。炭焼きの話から、話題はいつしか森づくりになりました。以前は湧き水も豊富で、大雨で鉄砲水が出ることもなかったそうです。ところが、昭和30年代からスギ・ヒノキばかりを植えてからは、雨水は山肌を一気に流れ、地面に吸収される力(保水力)がなくなったといえます。スギ・ヒノキを植えるにしても広葉樹の混じった混交林にしなくてはだめだというのが山で仕事をし、変化を見てきたヒトの意見です。